

お寺の社会性

— 生奥坊主のつごやき —

十一

竹中尚文

1. 供養から生死の考察へ

日本の仏教は明治以降、ずいぶんと変化をしたという。実際には、明治時代からゆっくりとした変化をしてきたと思う。私は、僧侶になって約 35 年、住職になって約 10 年になるが、その変化を感じることもある。例えば、先々代の住職がやっていた仏事の中で、私はしないことがある。

ウチの寺では 50 年ほど前には仏事の中で供養という言葉を使っていたが、私は使わない。このことは私だけに限ったことではなく、私たちの宗派に共通することだろう。供養という言葉は、本来は仏様にお供えをするという意味

であるのだが、一般的には追善供養をさす言葉となっている。追善供養というのは、死者に対して四十九日間、あるいは百日間、金品や食べ物のお供えをする。それは死者が成仏できるように死者に代わって善行を積むのである。坊さんはそのお供えのおこぼれを貰って帰るのだった。私の先々代もそうであった。

ところが私たち浄土真宗は、阿弥陀仏の力によって即得成仏すると説く。従って追善供養の必要性はない。今は、追善供養の必要性がないことを強調するから、あえて供養という言葉を使用しない。

追善供養を不必要とする浄土真宗は、

仏事を「お聴聞(ちょうもん)のご縁」と言う。仏法を聴く機会なのである。仏法を聴くことで自分の人生を考え、自分の死を考える機会なのである。こんな事を言うと、「私のお葬式は…」などと言い出す人がいる。お葬式の話と死を語ることは、全く違う話しである。

私の寺では、この 50 年から 100 年の間に、仏事において「供養」から「生死の考察」に変わった。他の言い方をすれば、仏事の中心が「お経をあげる事」から「法話を聞く事」に変わった。

このような変化は、浄土真宗で顕著であるが、仏教全体に同じ方向性の変化があるようだ。この変化は、明治時代に日本にキリスト教が入ったからだと言われている。教会での儀式では説教が中心であることに仏教は変化の必要性を感じたと言えよう。

他にも明治時代以後の変化がある。ほとんどの宗派の坊さんが正式な結婚をするようになった。但し、浄土真宗は開祖の鎌倉時代から結婚をしていた。とにかく、お寺で家庭生活を営むようになって、地域社会との結びつきが強

くなってきた。また、ここ何十年かの間に仏事でのお経の時間が短くなってきている。そして法話の比重が重くなった。

仏教のこうした変化は、明治時代にキリスト教が日本に入ったことに端を発するかもしれないが、仏教の変化は社会変化に伴ったものである。また、この変化がゆっくりとしたものであるがためか、社会全体の中では仏教の変化は見落とされがちである。

2. 坊主めぐり

お寺の変化に社会が気付きにくい理由として、普通の人々が仏事に会う機会が少なくなっているからだろう。従って法話を聞く機会も少ない。仏教文化講演を聴く機会があっても、法話を聞くことは少ない。仏教を語る文化人の講演は思いのほか頻繁におこなわれている。法話を聞くとするのは、それぞれの人達の念頭に仏がなければならぬ。仏に対する意識がなければ、法話を聞くことではない。もちろん話し手もその意識は不可欠であるが、私は法話の話し手と聞き手の区別があるの

ではなく、共に聞き手であると思っている。

普通の生活をしていて、仏に対する意識を持つというのは少ない。そんな意識を持つのは大切な人が亡くなった時であろう。私は、日本の社会がまだ仏教を宗教的背景としている社会だと思う。普通の人大切な人を亡くした時には仏に対する意識を持っているように思う。

大切な方が亡くなった時は法話を聞く機会である。もちろんその時には、本気で法話をしてくれる坊さんが必要である。仏事というのはそれなりによくできている。お経をあげている間に心が静になってくる。だから、私はお経を聞いているのではなくて、できるだけ一緒にあげて欲しいとお願いをする。その流れの中で法話を聞く準備をする。お経を声にすることで、意識はお経に集中して静かになる。聞く耳が作られているのである。講演と違って法話は感動させる話しや教養を深める話ではなく、話しを聞いた人が仏について何か語りたと思うようになる話だ。

話を戻そう。法話を聞く機会が少な

い。大変に乱暴な数字であるが、今のお寺で門徒や檀家の 5%の数字が年間の葬儀数だと言う。何もしっかりした統計で言っているのではなく、住職たちの実感で言っている。つまり 100 軒の家庭に対して 1 年間で 5 件のお葬式があると言うのである。観点を変えれば、ひとつの家庭において 20 年に 1 回のお葬式があることになる。いやいや、昔はお葬式が 20 年に 1 回よりも多かったと感ずる人もあるだろう。昔はもっと家族数が多かったので、お葬式の頻度は 20 年に 1 回より多かったはずだ。

仏を思って法話を聞く機会は 20 年ぶりの七日参りだ。四十九日の間は法話を聞く機会なのだが、その機会を逃すことも多い。坊さんがずぼらでお経だけをあげて帰ってしまう。七日参りの時間がとれない。法話に出会う機会はますます遠のく。

七日参りで法話を聞く機会に恵まれなければ、一周忌でも三回忌でも法話を聴く機会はなさそうだ。それでは単なる儀式になってしまう。坊さんが法事という儀式をただけになってしまう。さみしいなあと思う。そんな坊さ

んばかりだという声も聞こえるが、私の知る限りではそんな坊さんはばかりではない。

普通の人が坊さんとの関わりをどのように持っているのだろうか。まず、ずっと昔からこのお寺と関わってきたからと言うのが多数派だろう。その宗派の教えに不満もなく、そのお寺の坊さんにも不満もなければ現状維持と言うことになる。

次に、葬儀屋さんに紹介されたりとか、墓石業者に紹介されたりしてお寺との付き合いが始まった人も少なくない。新たなお寺との付き合いの始まりである。

この場合、葬祭業者や墓石業者が坊さんの法話を聞いたりはしない。お寺が墓地を持っているとかの理由があるようだ。なかには美坊主ということもあるらしい。『美坊主図鑑』という本が売れているらしい。私も狸に似ている。図鑑に載せてくれんかなあ。

坊さんを選ぶ時に、選ぶ要素に「法話」と言うのがあってもいいだろう。いいかげんな坊さんばかりだと言われるが、いいかげんな出会い方ばかりしては、それはそうだろうと思う。

たとえば自動車を買う時、エンジンは付いていないが、ボディの色や形を気に入って買ったようなものだ。自動車じゃないと言っても、そもそも自動車を買っていない。

3. 坊さんとお寺

いい法話を聞けると言うのは、繰り返しになるが話術の巧みな坊さんというわけではない。その話をきっかけとして、それぞれの人が仏様のことを思ったり、話したくなったりする話である。

しかし、いい法話を聞ける坊さんに会おうと、そのお寺でもいい法話が聞けることが多い。お寺ではいろんな法要をしている。その時には法話のために講師が呼ばれて法話が聞ける。お参りに来る坊さんがいいかげんであれば、そのお寺での法要も形だけであることが多い。形ばかりのお寺と言うことになる。形ばかりのお寺だから、お寺は不要であるという坊さんもいる。派遣の坊さんで、お葬式や法事に出掛けていってお経をあげるだけという坊さんもいる。法話も何もない、お経を読む

こともないから、お経の内容も気にならない。ただお経をあげるだけという坊さんもいる。

お寺って、なんだろう。

盆や正月の風物詩としてテレビで報道される人出の多いお寺もある。ヘンな言葉だけれど、「観光寺院」というのもある。カリスマ住職というのか、人を引きつける住職のいるお寺もある。

私が住職になった時に、カリスマ住職を目指さないことにした。私がカリスマ住職になれる資質を持ち合わせていないことも確かである。普通の人達の生活のなかにあるお寺を目指したいと思っている。その必須要素は、そのお寺でいいお話が聞けると言うことである。そんなお寺には足を運ぶ意義がある。それぞれの人生に何かしらの意

味を付与するお寺であってほしい。

大切な方が亡くなるという悲しい出来事があって、それが始まりで生死の意味を考える。人生の意味を考えるようになることがある。そんな時こそ、法話に出会って欲しい。たくさんのお話を聞いて欲しい。たくさんのお話を聞くためにお寺の法要に足を運んでもらいたい。さらに法話に出会える。仏に出会うことで人生の味付けが変われば、悲しいだけの死ではなくなる。

私は、それがお寺に対する社会の要請だと思う。自分の暮らす社会が私に何を要求しているのか明確に理解することは難しい。しかし、望ましい自分と望ましい社会をイメージしながら、私は生きていきたい。